

253 振動障害者の骨変化における核医学的イメージングの観察。

福島県立医科大学 放射線科  
木田 利之  
成田医院 内科  
成田 滋

〔目的〕

振動障害者においては諸関節の痛みを訴えるものが多く、特に振動に関係の深い部位即ち頸椎および上肢の諸関節にいろいろな骨変化を来すことが知られている。今回、われわれは振動障害者に全身骨シンチグラフィを行い、その骨シンチグラム所見および診断的意義について検討した結果を報告する。

〔対象・方法〕

対象は、某製鋼工場の振動工具使用者について振動障害に関する特殊健康診断を実施した結果、振動障害者と認定された17例(すべて男子)で年齢は36~57才(平均48才)である。方法は、Tc-99m-MDPの10mCi 静注、3時間後に東芝製全身カメラを用いて前後面の全身像を撮像し、更に骨変化の来し易い部位即ち頸椎、ひじ関節、手関節および手指骨についてSpot撮影を行い、レ線像と対比した。

〔結果〕

頸椎：レ線像では骨棘形成、椎間板狭小、椎間孔狭小または項じん帯骨化などなんらかの変化を認めたのは17例中15例(88%)で、骨シンチで異常集積を認めたのは4例(24%)にすぎなかった。

ひじ関節：レ線像で主として骨棘形成、次いで関節ネズミカみられたのが9例(53%)で、骨シンチでは12例(71%)に異常集積を認めた。

手関節：レ線像では骨棘形成、関節裂げき狭小などを認めたもの3例(8%)にすぎなかったが、骨シンチでは13例(76%)にRI異常集積を認めた。

手指骨：レ線像では骨棘形成、関節裂げき狭小、屈曲拘縮を認めたもの6例(35%)に、骨シンチでは9例(53%)になんらかの異常を認め、変化を認めた部位数からみると、レ線像では31カ所、骨シンチでは120カ所であった。

以上の結果から、頸椎の変化の検出は断然レ線像が優っており、手関節および手指骨の変化の検出はシンチ像が優っていることが判明した。

254  $^{99m}\text{Tc}$ -pyrophosphate による歯原性腫瘍3例のスキニング所見について

日本歯科大学歯学部 放射線学教室  
金子昌幸、古本啓一

臨床歯学領域におけるRI利用の頻度は、臨床医学領域のそれと比較して、極めて低いといえるが、近年、悪性腫瘍の診断あるいは治療など、歯学領域においても、RI利用の頻度は除々に高くなりつつある。

本学放射線学教室においても、悪性腫瘍の診断時には、ほぼルーチンに $^{67}\text{Ga}$ -citrateによる腫瘍スキニングを実施し、範囲の確認および良性悪性の判別を行い、合せて $^{99m}\text{Tc}$ -pyrophosphateによる骨スキニングにより、腫瘍の骨に対する影響の検索を行っている。

しかし、悪性良性を問わず、歯原性腫瘍の診断に、RIスキニングを応用することは極めて稀で症例も数例を数えるのみである。

今回、われわれは、下顎骨々体部に発生した歯原性腫瘍3例につき、 $^{99m}\text{Tc}$ -pyrophosphateによる骨スキニングを行う機会を得たので、それらのシンチグラム所見と、非歯原性腫瘍のシンチグラム所見とを、比較しながら報告する。